



### 集団知 26

●集団知(知っている、知らないに関わらず、集団として受け入れた価値観・判断)の続きである。

●高二英語の話から。創学舎では、英単語ターゲット一九〇〇を使わせて単語テストをやっているが、一日に、何語やっているか調査することがある。九月のある日、驚きの数字が出た。一日に一九〇〇個。いやいやとんでもない。そしてこんなうれしいことはない。所要時間は三〇分程度とのこと。高二でも、一日三〇〇個とか五〇〇個とか一〇〇〇個やる生徒は何人もいるが、一九〇〇個やる生徒は高3になってせいぜい二、三人が普通である。それがこの時期に。先が楽しみである。

●保護者面談で、こういうことを話すと、「反論されるのが何度もあった。『無理です。ただ見るだけじゃないですか?信じられません。』反論なきらない方もほとんどは、おそらく、疑っていらっしやっただけと思う。何より、生徒達も最初は信用してくれないのだから。しかし、私は覚え方とその効果をいい続ける。そして一人、また一人とやり始めて、一日一〇〇個、二〇〇個、三〇〇個と増えていく。

●実は、単語のやり方について助けてくれるのは習慣化に成功した高3生である。高2生の面接をしているとき、高3生を見かけたら、中断して、高2生に話をきかせる。「一日にいくつやっている?」「八〇〇個です。」「どれくらいかかる?」「五分くらいですかね。」「いつやるの?」「電車の中です。」「こういうやりとりをきいた高2生はやって

みようかなという気になる。協力してくれた高3生の皆さんありがとう。

●やり方については、以前に書いたので、今号では省略するが、単語ひとつとっても様々な意見がある。「単語は書いておぼえろ。」「辞書を引いて単語帳を作れ。」「文章の中でおぼえろ。」「意味は全部おぼえろ。」「派生語も大事だぞ。」「

●全て正しいと思う。そして、私は全て実行してきた。きつと、英語を教えている人はやってきたことのはずだ。しかし、大事なのは習慣化である。習慣にするために、教える人自身がどういう工夫をしてきたのか、どういう苦労をしたのか知りたいところだ。

●さて、生徒を見ると、ほとんど習慣化に失敗している。勿論、生徒によって言語能力や処理能力などに多少の差はあるが、志望校の設定は、ほぼ適切でやり方次第で十分に狙っていけると思えるものである。そして、合格に必要なことの大きなひとつが、習慣化で、これをどうするかが全科目にわたって共通の課題となる。(単語についての続きは次回に) (小林)

### 「学生時代の体験より」

突然ですが、皆さんは第一印象で人や物事を決めつけてしまうことはないですか?私たちは初めて誰かと出会うとき、その人の内面を判断する情報を持ち合わせていないため、つい表面的な情報で「その人」を判断してしまっていることがあります。

そして、それは人に限らず、物事にも言えると思います。実際、人の第一印象は会って三秒で決まると言われていて、その際に「視覚情報」が最も



影響を与えると言われていきます。これは「メラビアンの法則」と呼ばれるものですが、それだけ第一印象というのは拙速に形成されるものなのです。そこで今回は、第一印象に左右されず、その裏にある姿を見極める意義を皆さんにお伝えしたいと思えます。

七年前の夏、大学生の私は校内でロシアへの短期語学研修に関するお知らせをたまたま目にしました。私の出身地である新潟市はロシアの極東三市と姉妹都市提携を結んでいます。ロシアとは、新潟港を通じて貿易が行われています。私は子供のときから近所のスーパーでよくロシア人を見かけ、異国に対し思いを馳せてきました。大学生のとき、海外に行きたいと思いつつも一度も行ったことがなかった私はロシアという国に関心を持っていて、また、市からの助成金を受けられることもあり、思い切つてその研修に応募しました。ロシア語を全く話せなかったため、現地で困らないための最低限のロシア語を急いで詰め込み、人生初のロシア研修(初海外)に備えました。出発前夜は不安と興奮が交錯し、あまり寝られなかったのを覚えています。

研修初日、ロシアへ向かう飛行機内では念願の初海外の夢が叶ったという喜びと興奮が渦巻いていましたが、いざロシアの地に足を踏み入れると、目の当たりにした現実には違和感を感じました。どういうわけか、現地の人々は皆揃ってどこか不機嫌そうな表情をし、鋭い眼差しで私を睨みつけているような気がしました。そのとき、私は何かご法度を破ったのかと一時思考を巡らせました。しかし、特に思い当たる節はありませんでした。一体、なぜロシア人は笑わず、近寄りたがいない表情をしているのか。――私はそれ以降ずっと疑問と違和

和感を感じ続けました。結局、その理由が解らぬまま研修全日程を終え、帰国しました。

大学二年生になると、あの異国への興味が冷めやらぬなか、ロシアについてもっと本格的に学びたいと思い、ロシア語とロシア文化の授業を履修しました。私にとって何もかも新しいことだらけの授業についていくのは非常に大変でしたが、なんとしてもあの真相を確かめるため、授業に一杯食らいつきました。また、ロシアサークルという活動にも加わり、ロシア文化について知ったり、ボルシチなどのロシア料理を作って食べたりして、異文化理解に努めました。

ある日、キャンパス内でロシアの極東都市ハバロフスクの大学からの交換留学生に会いました。彼女に思い切つて「ロシア人はなぜ笑わないのか」と聞いてみました。すると彼女は私にこう言いました。「私たちは子どもときから、理由もないのに笑うのは避けるように言われてきました。『意味のない笑顔はバカの印』ということわざがあるほどです。」私は彼女の言葉に耳を疑いました。日本では、親しい人に笑顔を見せることは当然のことで、初対面の人に対しても笑顔を見せることによつて親しみを伝えます。私たちは笑顔が対人関係を円滑にする文化を共有しているといつても過言ではありません。それに対し、笑顔は不必要に振りまくものではないというのは、日本人の思想とは相反するものではないでしょうか。当時、このことについてもっと知りたいと思いつてみたら、ロシアの常識では特別親しい相手でない限り、笑顔を見せることはあまりないことがわかりました。また、プロ意識からか仕事ならなおさら笑顔を見せる機会は少ないことを知りまし



た。さらに、笑いは心から発するものとされ、形式的な微笑みはロシア人が苦手としているものとされています。これは、もともとロシアの庶民は帝政とそれに続くソビエト時代に体制の厳しい監督下での生活を強いられてきたことが原因だと考えられています。何も知らなかった私は、あのかの謎がようやく解けたと感じました。

そして四年後、旅行で再びロシアを訪れました。ロシア人はまた仏頂面で私を見るのかと思っていました。しかし、現地の人々の表情は以前私が目にしたものとは違うように見えました。彼らの顔つきがどこか生き生きしていたのです。大学で学んだロシア語で現地の人々とコミュニケーションをとるたびに、相手の表情もほぐれとその躍動的な表情を見て、私が初めて来訪したときのあの光景は一体何だったのだろうと思いました。

余談ですが、旅の途中で私は風邪を引いてしまいました。私の鼻声と鼻をかむ姿を見かねたロシア人の友人は、近くの薬局まで私を連れていき、私のために薬まで買ってくれました。「早く良くなりませうように」と言いながら、彼女は私に薬を渡しました。そして、彼女は親切にもウラジオストク(ロシア極東の都市)の市街地を案内してくれました。ロシア人の優しさが身に染みた瞬間でした。

ウクライナ侵略によりさまざま論じられるロシアですが、この経験から私は、言葉、文化、国民性、そしてロシアという国の一端を理解することができました。冒頭でも申し上げたとおり、第一印象は人や物事の重要な判断材料になります。しかし、それだけにとらわれることなく、その裏側に隠されている姿を見つけ、人々がお互いを理解し、認め合えることを切に願っています。(石崎)

## 日帰り旅行

先日銚子に日帰り旅行をしてきた。この日帰り旅行、私たち家族にとってやっと実現した旅行である。旅行に行こうと話題に出ても私も妻も計画を立てるのが苦手?面倒?でなかなか重い腰が上がるらない。しかし今回はそうも言っていられない。なんとか実現にこぎつけた。

大きな理由のひとつは、高三の娘の存在。高校に入学すると同時にコロナが広がりにすぐに休校。その後いろいろな不便なことも多かった。まあそれはいつでも同級生は同じ思いをしているので我が子だけのことでない。

しかし、高三の修学旅行。あれは高一の終わり頃か高二の初めだったであろうか。修学旅行に参加するかどうかの案内が来た。コロナも収まったりはあったりで、まだ先行きも不安定である。そんな中、参加の意向を問われたのである。夫婦で話し合って、みんなが行くのであれば行かせてあげたいと思っていた。よく案内を見ると、「万が一コロナに感染した場合は迎えに行きます。」というチェック欄がある。修学旅行先は沖縄。沖縄はコロナも流行った時期もあり、感染の可能性はゼロではない。夫婦共働きの我が家では、沖縄まで迎えに行くことなんてできない。娘とも話して泣く泣く不参加で用紙を出すことにした。



後日、どのくらいの生徒が修学旅行に行かないのか娘に聞いた。なんと学年で四、五人だそう。そうなのか!今更希望の変更はできないので結局不参加。娘にはもちろん悲しい思いをさせてしまったが、私にも、しこりの残る出来事であった。

コロナが収まったら旅行に行こう、ということが我が家に決まった。

しかし、コロナは収まらない。計画も立てない。ずるずるゴールデンウィーク、夏休みが過ぎてしまった。

さて、なぜ銚子か?テレビで特集でもしていたか?理由は忘れたがとにかく行くことになった。今回は実現させなくてとは計画した(というほど大した計画もないのだが)。実行日が近づく。天気予報では台風が来ていた。残念ながら延期。日帰りのいいところは一日で完結しているので、延期が簡単。次の休日に実現させた。



娘は修学旅行の代りとも思っていないであろうが、とりあえず私は一つミッションをクリアした気分である。

昔、ハワイのダイヤモンドヘッドから見た水平線。あれが忘れられず旅行に行くと灯台にのぼる。写真の記録を調べたら五年前にも房総の南の灯台にのぼっていた。今回は犬吠埼灯台。のぼったその先の景色はよかったが、風がものすごく強く怖いくらいだった。

まあ旅行の自身はさておき、旅行に行ったことで思い出が一つできた。

娘と同様みんなも、コロナで以前のように普通に行えないこともまだまだあると思う。しかし、みんなはまだ若い、それほど腰も重くないかもしれない。何かしたいなと思ったら、多少面倒な気持ち、困難があってもぜひ行動してみしてほしい。結局そのように行動したことが思い出となって記憶に残っていくのだから。(松永)

## 英検二級とつちやえは(前編)

●高学歴で社会的成功を納めた人の発言は耳目を集める。共通テスト導入と同時に、民間の英語の試験を併用するという提案がなされたときもそうだった。結局、教員現場からの反対の声もあり、その拙速な計画が明らかになり中止となった。英語で民間試験を導入するに際して様々な意見があり、支持する方々の代表的なのは、「文法ばかりやっているから使えないんだ。」というものであったと記憶している。

●勿論、話せるようになったほうがよいのは確かだが、かの発言は教育現場の表情は知らず短絡的な推論によるものと思う。発言者自身は学力的には優秀で知的な環境に恵まれ努力をなされたのである。しかし、高校生をみていると、そういう人は少ない。大半は授業に参加して、教師の話はきいているしノートもとるがそれだけ。スポーツや音楽と同じで、毎日やるしかないのだが、教師はそのための工夫も教えないし、せいぜい、はげますだけ。伸びるはずがない。単語もおぼえないし、文法も身につかないし、英文もよめるようにはならない。(因みに、今は文法の時間は、親の代と比べてかなり減っています)会話をしようにも、一クラス四十人もいたら、教師と向き合えるのは一人一分。学力がない生徒同士でやっても何の成果でもない。

●そういう状況の中で、世の中や行政を見ると、英検などの結果で成果を測るような空気がある。また、最難関大を除いて、有力私大では英検二級をもっていれば、本来の入試で英語が免除されるところも多い。保護者の中にも英検に一定の価値をおいている方も少なくない。だとしたらとつちやえは。けっこう楽ですよ。(以下次号) (小林)